

くと次のような感想を持つことになる。ロバートは必ずしも理想的な人物ではない。ゴeringは必ずしも怠け者ではない。理想的な夫とはどんな人物のことか。伯爵はどんな人間を念頭に置いて「理想の夫」という言葉を使ったのか。そして、もし伯爵が事実を知ったとしたらどうなるだろうか。すなわち、ロバートとゴeringの「実体」を知ってもなお「理想の夫」という言葉を使うだろうか。この芝居はロバートとガートルードの家庭がその崩壊の危機を脱し、ゴeringとメイベルが結婚することになりハッピーエンドとなる。その中でキャヴァッシュ伯爵の言葉は観客の苦笑を誘うだけでなく、人間の奥行の深さを気付かせるものであり、この芝居において重要な役割を果たしているのである。

次に、メイベルの理想の夫にならなかつたら勘当するという伯爵の言葉に対するゴeringの反応を考えてみよう。彼は反発するだろうか。あるいは、ロバートの秘密を父親に暴露するだろうか。彼はどちらもしない。舞台の上で沈黙を保つ。彼が沈黙することによって観客は彼の心の中のひそかなつづやきを聞くことができる。すなわち、「過去の過ち」は完全に無視してよいことではない。しかしそのために一人の人間の現在と将来の人生までが破滅してよいことにもならない。可能な限り慈悲の心を持つことが大切だ、と。そして、これは同時に作者ワイルドの「過去の過ち」に対する考え方を垣間見せてくれると言えるのではないだろうか。

このように考えてみると、キャヴァッシュ伯爵の「理想の夫」という言葉はこの芝居が深い余韻を残して終わることを可能にした重要な言葉であったと言える。

『ドリアン・グレイの肖像』と世紀末

新井透

(名古屋市立女子短期大学)

オスカー・ワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』で美に対する尽きることのない願望と、人間の心の奥にある魂の深淵を描いている。主人公ドリアンはデカダンスや唯美主義、あるいはダンディズムといった19世紀末の精神風土を体現している。またペーターの『ルネサンス』(1873)の影響は大きい。特にヴィンケルマンのギリシア美術についての引用や、ミケランジェロの絵画、彫刻に対する言及で、男性の肉体美に至上の美を見出しているペーターから、ワイルドは多くのことを学んでいる。たとえば「優雅はかれのものであり、少年らしいあの純白も、古代ギリシアの大大理石がとどめてくれるような美も、かれのものだ」とヘンリー・ウォotton卿はドリアンのことを語っている。

しかし人間は絵画や彫刻のように永遠の美を保つことはできない。それゆえにドリアンは、バジル・ホールワードが描いた自分の肖像画を見た時、自分の美しさに陶醉すると同時に、「時」の残酷さに身震いするのだった。ドリアンのこうしたナルシズムはアンドロギュノスの性質をおびていて、異常なまでの美に対する欲望がある。しかしシビル・ヴェインとの愛の破綻によって、ドリアンは墮落していく。すなわち世俗を軽蔑し、美をあくまで探求しようとするダンディズムから少しずつ離れて、単なる利己主義的な官能や快楽の追求と犯罪に墮して行く。

シビルはラファエロ前派の画家たちが好んで描いたオフィーリアのように純粹無垢で、愛に殉じた女性である。実際にロセッティやミレーの描いたオフィーリアを連想させる箇所もある。シビルはサロメのような魔性の女とは対極に位置するが、結果的にドリアンを破滅に導くという意味で、「宿命の女」(femme fatale)と言えるだろう。

ホルブルック・ジャクソンは『世紀末の芸術と思想』(1913)の中で、『ドリアン・グレイの肖像』は道徳的な物語であると主張しているが、肖像画を見てドリアンが、「自分にとって良心のようなもの」と言っているように、シビルの死を境にして倫理的に変貌していく。ドリアンには無垢と悪魔主義が緊張状態にある。バジル殺害後、肖像画はドリアンにとって一種の良心の役割を果たし、彼の墮落とともに肖像画にも変化が現われる。このような超自然的なオカルティズムはボードレールやユイスマンスの影響によるものと考えられる。ドリアンには死の影と罪の匂いがただよう。彼の美貌は仮面にすぎないと認識した時、真の悲劇がおとずれる。それはシビルが女優という影——仮面をぬいで、素顔の実像を発見することによって破滅したのと同様である。したがって序文にある「表面の下をさぐろうとするものは危険を覚悟すべきである。象徴を読みとろうとするものもまた覚悟すべきである」という文は大きな意味を持っている。画家のバジルを含め、シビルもドリアンもこうした危険を冒したと考えられる。

もう一人、ドリアンに決定的影響をおよぼしたのはヘンリーである。バジルのアトリエでドリアンに会った時から二人の関係は密接なものとなる。ヘンリーはドリアンにダンディズムをぶきこみ、パラドックスを駆使した彼の雄弁はドリアンを魅了する。しかしながら彼は実体のない影のようである。彼にはドリアンのような行動力は持ち合わせていない。退廃の世界で生きているという点でデカダンスを体現している。彼の周囲にあるライラックや蘭、すみれと言った花の色から「薄紫の90年代」と呼ばれる同性愛的な含意を読みとることができる。ドリアンとヘンリーはホモセクシュアルな関係ではないが、バジル同様、潜在的な同性愛の傾向がうかがわれる。

ヘンリーは貴婦人たちの会話の中で、頂点にまで登りつめた大英帝国の現状の不安定な状況を冷めた眼で見ている。「西欧の黄昏」と言われた世紀末のヨーロッパはダーウィニズムの影響でベシニズムにおおわれていた。彼らの幻滅感も時代を象徴している。

以上のことからワイルドは世紀末という時代に敏感に反応したことがわかる。伝統的・因習的なものの考え方には反抗したが、『ドリアン・グレイの肖像』を読むと、ワイルドはある意味でとても倫理的であった。

ワイルドの結婚

西村孝次

(日本ワイルド協会名誉顧問)

「コンスタンツェは一家の殉教者、姉妹のうち一番ところが温かく、家計のやりくりも心得ています。彼女は最良のころをもっています。ぼくは彼女を衷心から愛していますし、彼女も心底からぼくを愛してくれています」とモーツァルトは妻のことを書いている。だが、おそらく誰もこれを額面どおりには受けとろうとしないであろう。

そして、もしオスカー・ワイルドが妻コンスタンス——このドイツ語はコンスタンツェであるが——について、ウォルフガング・アマデウス・モーツァルトのと同じ手紙を書いていたとしても、その反応は多分似たようなものだったに違いない。およそ天才の妻は悪女なりとの俗説が余りにも固定化しているからである。なるほどクララはシューマンにとって、コジマはワーグナーにとって良妻とはいえなかったし、コンスタンツェ自身も必ずしも理想的もしくは模範的な良妻とは称しがたい点がなくもなかった。しかし、コンスタンス・メアリ・ロイドが聡明で現実的な家庭婦人であったことは、くしくも同じ1983年に出た Anne Clark Amor, *Mrs Oscar Wilde: A Woman of Some Importance* 『なかなかの女』(Sidgwick & Jackson) と Joyce Bentley, *The Importance of Being Constance* 『貞節が肝心』: A Biography of Oscar Wilde's Wife (Robert Hale) の二冊が、それぞれ観点に若干の相違こそあれ、ともに詳しく伝えている。コンスタンツェもコンスタンスも世に喧伝されているような、そんな悪女・悪妻ではなかった。

しかもコンスタンツェ・モーツァルトの9年間の結婚生活が意外なまでに幸福だったのに反し、なぜコンスタンス・ワイルドの14年間のそれは、あれほど不幸な歳月でしかありえなかったのか？

ワイルドは、1874年10月17日から1878年11月28日までの、あの輝かしいオクスフォード大学時代(詳しくは Norman Page, *An Oscar Wilde Chronology*, pp. 3-12 (Macmillan, 1991) の某日もしくは某夜、'Old Jess' と呼ばれる大学生相手の娼婦を抱いて梅毒をうつされた(ちなみに 'Old Joe' とは性病の俗語である)。この事実をリチャード・エル